

第2章 遺族の手記

「お父さん、痛かったろうね」

55歳 女性

お父さんが突然いなくなって1年が経ちました。

あの日の出来事は、頭の中から消えません。

平成23年12月、交通事故に遭い、81歳で亡くなりました。

この1年の間、経験したことのないたくさんの辛い事を一つずつ乗り越えて来ました。

お父さんが亡くなる前日が、81回目の誕生日でした。

大村競艇場のボートレースに行くのが唯一の楽しみだったので、軽いジャケットをプレゼントしました。

「肩が凝らんけんボートも当たるかもね。」と言うと、ニコニコ笑ってすぐ袖を通して、「これはよか。あったかい。」と言って、とても喜んでくれました。「88歳の時はみんな集まり料理屋でお祝いをしよう。」と話して、お父さんの好きな物を作って、家族4人で食事をしました。これが最後でした。

翌朝、私が5時半に起きると布団がたたんであり、お父さんがいなかったのも、いつものように妻である母の墓へ水を替えに行き、そのあと、船着場へ競艇の出走表を取りに行っていると思っていました。

いつもの時間に帰って来ないので心配になり、妹に話をし外を見ていました。

そうしているうちに、「交通事故があり、身元の分からない70代の男性…」という役場の放送が聞こえました。

すぐ、役場に電話をかけました。警察の方が来て下さって写真を見ると、お父さんでした。それから何をどうしたのか。

大学病院に駆けつけ、先生から、ほぼ即死だったことを聞きました。

お父さんのところへ行ったらベッドに一人ぽつんと冷たくなっていて、包帯を巻かれ、息を引き取っていました。

「お父さん痛かったろうね。何の手も取らんで一人で死んでいったとね。」と声をかけました。どんなに叫んでも、泣いても、何の返事も返って来ませんでした。

それからが、辛く苦しい日々の始まりでした。

静かで、口数も少ないじいちゃんでしたが、私達の生活も一変し、こんなに大きな存在だったんだと命の尊厳を知りました。

お父さんは4人の子供を育て、母を早くに亡くしたので寂しかっただろうに。真面目にこつこつ生きてきて、まだまだ、たくさん幸せな思いをさせてあげたかったし、味わう権利があったのにと、悔しい気持ちで一杯でした。

前に進んで行くために、一つずつ事を済ませながら、裁判所にも行きました。

何の知識もない私に、検察官の方が分かりやすく説明をして下さりました。

交通事故の真実や加害者の思いを聞き、刑が確定したのは9か月が経過してからでした。

誰も花を手向けることのなかった事故現場に花を持って行けるようになったのはこの頃でした。

たくさん車が、まるで何もなかったかのように往来し、大きなトラックが走って行きました。こんなものかと思いつく思い知りました。

毎日、テレビのニュースでは、高齢者の交通事故を報道しています。無くならない交通事故。胸が痛くなります。

お父さんは、ただ、歩道を歩いていただけなのに。

